

春 告 草

第 43 号 平成 28 年 11 月 30 日 進路指導部発行

「出願プラン」を考える

明日から期末試験。6 年生にとっては最後の定期試験だ。大学受験へのカウントダウンが始まっている最中であるが、しっかり乗り切ろう。

期末が終われば入試本番へ向けてのラストスパート。いよいよこれから「現役生が力を伸ばす時期」になる。体調管理には十分に気を使いながらも、最大限のパフォーマンスが発揮できるよう、学習プランを立てて、それを実行していこう。

さて、受験勉強は大切だが、この時期は勉強以外のことにも注意しなければいけない。どこを受験するかの「出願プラン作成」である。平均的に何校受験するのかなどデータを参考にしながら、それぞれの作戦を立てていこう。※本稿は蛍雪時代 11 月号の記事の内容に本校での事例を元に編集しました。

センター試験まで52日
頑張れ二期生！

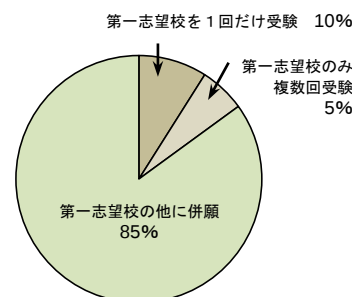
Kites rise highest against the wind – not with it.

風が一番高く上がるのは、風に向かっていている時である。
風に流されている時ではない。Winston Churchill

大学入試「併願」の実態を知ろう

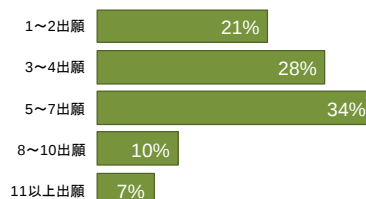
1. 大学受験で「併願」した？

第一志望校だけしか受験しない（行きたくない）という人は別として、第一志望の他に数校を受験する場合がほとんどである。併願する場合は、チャレンジ校、実力相応校、合格確保校という具合に難易の差をつけて受験するケースが一般的で、併願をした生徒の 61% は「より良い結果を得られた」と回答している。



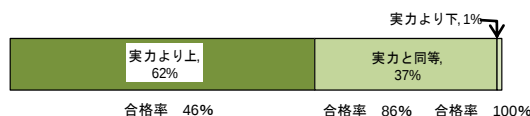
2. 何校受けた？

十分承知していると思うが、入学試験は「数撃ちや当たる」訳ではない。実力が発揮できるプランを考えて受験計画を立てることが大切だ。私立大学は 1 月下旬から 3 月上旬にかけて入試が行われる。1 校受験して間隔をあけて次を受験すれば、試験の復習もできるし、体力の回復も図れるのでおススメだが、主要な大学は 2 月上旬から中旬に集中する。どうしてもここは外せないというケースは連続受験になってしまうことも想定しておこう。私立大学の受験料は一般的などころで、1 回の受験で 35,000 円。国公立大は 17,000 円（センター試験の受験料は 3 科目以上の場合で 18,000 円）であるから、費用負担も考えれば、国公立大を含めて 5~6 校前後が平均的な出願数である。また合格率は旺文社提供データで 66% である。



3. 第一志望校の難易と合格率は？

模試結果でもっとも気になる「志望校判定」であるが、現役生徒が伸びるのは年末から入試にかけてと言われる。しかしその時期には模試は終わっているの、受験学力が上昇に転ずる（？）直前の模試の判定やセンター試験の自己採点結果が、志望校最終決定の判断材料になる。そんな事情もあり、過半数の人は実力より上を第一志望校に選ぶ状況がある。この場合の合格率は 46%（旺文社提供データ）。実力相応校（偏差値±2 程度）を選んだ人の割合は 37% であるが、合格率は 86% と高い。



4. センター試験利用入試は何校出願した？

全国集計データであるので、都内受験生と状況は異なるが、併願で利用した入試方式は「**センター利用 85%、学外試験会場 33%、全学部日程入試 27%、...**」となっている。地方受験生が地元で受験できる大学を併願している割合が高いが、センター利用入試は大いに検討すべきである。

気になるのはセンター利用入試に何校出したかという出願数の実態であるが、1～2出願が**64%**を占める。センター利用入試は、例えば「早慶狙いの受験生が、押さえ（合格確保）で **MARCH** に出しておく」など、自分の学力レベルより下位の大学に出願するケースが多い。この為、大学ごとに一般入試とセンター利用入試を比較すると、センター利用の方が難易度は高くなる傾向がある。

センター利用入試の可否は、自分の学力レベルと比べ上位校に合格が**39%**、下位～中位校への合格が**68%**となっている。

センター利用入試はどの大学も募集定員が少ないが、上位校狙いの受験生が押さえに出願するケースが多く、合格しても入学手続きをしないケースが極めて多い。この為、各大学では募集定員よりかなり多めの合格者を出す。例えば明治大学理工学部建築学科では**12名募集**のところに**1,094名**の出願があった。倍率は**90倍**を超えるが、合格者は**250名**で、実倍率は**4.4倍**である。時には、勇気をもって出願する強い気持ちも必要だ。

また、中央大学では複数の試験方式を併願する場合に「**選考料の特例措置**」がある。募集要項をよく調べて、入試日程や受験費用などの面で負担の少ない出願プランを立てよう。

中央大学の入試特例措置

- 特例措置①** 統一入試で1出願目の選考料は35,000円だが2出願目以降は1つにつき選考料は15,000円となる。
- 特例措置②** 一般入試出願者で、同一学部（法学部は同一学科）の大学入試センター試験利用入試併用方式、大学入試センター試験利用入試単独方式（前期選考）を同時に出願する場合は、一般入試の選考料（35,000円）だけで受験できる。また、一般入試出願者で英語外部検定試験利用入試に出願する場合にも、一般入試の選考料（35,000円）だけで受験できる。特例が適用となる出願パターンは以下の通り。
- ※一般入試と同一日に実施する同一学部の大学入試センター試験利用入試併用方式並びに同一学部の大学入試センター試験利用入試単独方式（前期選考）に適用。同時出願（同一志願票での出願）に限り適用。理工学部の大学入試センター試験利用入試併用方式は、一般入試と異なる日程のため特例措置は適用されない。

(例)

経済学部Ⅰ 試験日 2/14	一般入試Ⅰ	35,000円
	英語外部検定試験利用入試Ⅰ	15,000円
	センター併用方式Ⅰ（英語選択）	15,000円
	センター併用方式Ⅰ（数学選択）	15,000円
経済学部Ⅱ 試験日 2/15	一般入試Ⅱ	35,000円
	英語外部検定試験利用入試Ⅱ	15,000円
	センター併用方式Ⅱ（英語選択）	15,000円
	センター併用方式Ⅱ（数学選択）	15,000円
経済学部	センター単独方式（4教科型）	15,000円
経済学部	センター単独方式（3教科型）	15,000円

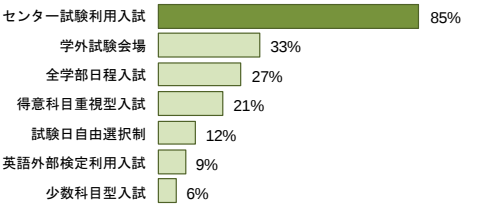
選考料合計金額
70,000円

※センター試験を国語、地歴・公民、数学、外国語の4教科受験しておけば、7万円で最大10の試験区分への出願が可能
中央大学は1枚の出願票ですべての試験区分への出願ができる
この場合は提出する調査書も1通で済む

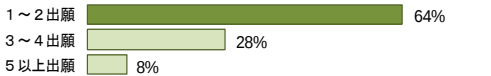
併願の目的を明確に

併願プランを立てるにあたって、大切なことは併願の目的を明確にすること。絶対に浪人が許されないのであれば難易度を慎重に吟味する必要があるが、本命受験前の予行演習であれば、出題傾向やレベルの近い学校を選ぶことになる。併願のメリット、ディメリットもあるので、これらを慎重に理解したうえでプランニングしよう。もちろん本命校合格が最優先課題であることは言うまでもない。

併願で利用した入試方式



センター利用入試の出願数



併願の「目的」	プランニングの「方向性」
絶対に浪人は許されない	→ 難易度や学力の相性を慎重に吟味する
行きたい大学が複数ある	→ 志望順位を明確にしたうえで併願する
第一志望校の滑り止め	→ 本命校受験の障害にならないように併願
志望校受験前の予行演習	→ 出題傾向やレベルの近い併願校の選定
本命受験前の自信づけ	→ 合格可能性の高い大学から順に受験する
難関大合格	→ 受験対策の時間と効率を重視して併願

入試方式・受験方法を研究しよう

6年生は受験直前、5年生も来年度の科目選択本調査の直前である。今一度、いろいろな入試方式のある私立大学を研究しておこう。

多様化・複線化した私大の試験方式

大学入試センター試験（1990年～）は勿論のこと共通一次試験（1979年～1989年）も無かった自分の受験生時代を振り返ると、国立大学は一度の試験結果だけで合否が決まった。受験の機会は国立一期校・公立大と国立二期校の2回あったが、一期、二期のランク付け（？）もあり、二期校に行くのなら浪人と覚悟を決める受験生も多く、実際私も一期校にしか出願しなかった。私立大学も今のような多様化した試験方式はなく、学部・学科単位の試験のみであった。この大学には、どうしても入りたいという希望があれば、学部を変えての併願が余儀無くされた時代である。

その頃に比べれば今は希望する学部・学科について、複数回の受験機会が与えられている。大学側からすれば受験料収入を見込むことができるという経営事情もあるのだろうが、中央大学のように受験料の特別措置を設ける大学もあり、受験生にとっては有難いシステムである。

私立大学の入試方式は多様化・複線化していて、同じ大学・学部で受験で何種類もの入試方式を選択できる場合が多い。大学の入試案内を見て、「いろいろありすぎて、何を選べばいいのか…」と混乱した経験の人も多いことだろう。やみくもに選ぶのは失敗のもと。選ぶ前にまず、それぞれの入試方式の特徴、メリットを理解し、併願の目的を達成する為に、そのメリットをどう活かせるのかを考えよう。

“早慶上理・MARCH”各入試方式の実施状況

	学部別日程 入試	センター 利用入試	全学部日程 入試	学外 試験会場
早稲田大	○	○		
慶應義塾大	○			
上智大	○		○	
東京理科大	○	○		
明治大	○	○	○	○
青山学院大	○	○	○	○
立教大	○	○	○	
中央大	○	○	○	○
法政大	○	○	○	○

学部別日程入試（一般入試）

募集単位ごとに行う個別試験方式。大学を受験する際の基本パターン。大学・学部毎に出題傾向があるので、過去問研究は欠かせない。

センター試験利用入試

センター試験の得点を私立大学が合否判定に用いる「センター試験利用入試」は、大多数の私立大学が実施している。センター試験を受けるだけで複数の大学に出願できるので、大学毎の受験対策も不要、受験料も割安とメリットは大きい。3教科型が主流だが、上位校には国公立大学志望の受験生確保という狙いで4～6教科を指定している大学も多い。また、センター併用型といって、一部の教科・科目を個別試験で行う大学もある。

全学部日程入試

学部別の日程で、別々の問題を使って行う一般入試とは別に、全学部が同日に共通の問題を使って一斉に行う入試方式。学部別日程と全学部日程で同じ学部・学科を受験することもできるし、どちらかを受験することで他大学との日程の重複を回避するといった利用の仕方もある。大学によっては、一度の試験で複数の学部・学科を併願できる場合もあり、受験生にとって利用する価値は大いにある。

学外試験会場

地方大学への進学を希望する場合に、地元で受験できるメリットは大きい。長距離移動の時間や体力面、費用面（交通費、宿泊費）での負担を軽減でき、何よりも受験日程にも余裕が生まれる。学外試験会場を設けている私立大学は多いが、一部の国公立大でも設置している。

メリットはここ！

- センター試験1回の受験で、複数の大学へ出願できる
- 個別試験対策の手間が省け、受験対策の効率が上がる
- 試験会場まで出かける必要がない

メリットはここ！

- 学部別日程＋全学部日程で、同じ学部を2回受験できる
- 他大学との試験日の重複を回避する目的で利用できる
- 大学によっては、一度の受験で複数の学部・学科を併願可能

メリットはここ！

- 長距離移動にかかる時間や体力・費用面の負担を軽減
- 移動日がなくなるなど、受験日程に余裕が生まれる
- 地元受験でリラックスして受験できる

試験日自由選択制

同じ条件の入試が何日もあり、その中から都合の良い試験日を自由に選んで受験できる入試方式。本格的な受験シーズンの期間には多くの大学の試験日が集中するが、この方式を利用すれば、併願校どうしの試験日の重複を回避することができる。また本命校が実施していれば、すべての試験日に受験する手もある。一般的には、2～3日の連続する試験日が設けられる。

メリットはここ！

- 受験する日を複数の試験日から都合に合わせて選択できる
- 他大学との試験日の重複を回避する目的で利用できる
- すべての試験日に出席して確実に合格を拾う作戦も可能

入試科目・難易度の検討について

入試科目と難易度は、受験結果に直接関係する重要な条件。自分にとって適切な条件かどうかを慎重に検討し、合格の可能性を正しく判断しなければいけない。入試科目の一覧表や難易ランキング表を眺めるだけでは正しい判断は望めないのも、まずは自分の学力を正しく把握し、各大学の条件と照らし合わせて判断することを心がけよう。

そこでまず、これまでに受けた模試の成績票など客観的なデータも参考にして、自分の学力を様々な視点から多角的に分析しよう。全体および各科目の現時点での学力到達度や現在までの学習状況や学力推移、各科目・分野の得意・不得意や自分との相性、今後期待できる伸びしろなどを検討してみよう。その上で、次に示すポイントを押さえて志望校の入試科目・難易度を検討しよう。

ただし、学力を客観的に分析しようとする、いたらない点ばかりに目がいつて弱気になる傾向が強い。弱気になってむやみに安全策に走らないこと。あくまでも行きたい気持ちを優先させて可能性を探ろう。

入試科目

第一志望校に合わせて 受験する科目を共通化

併願における入試科目の原則は「受験する科目の共通化」。各受験校の入試科目が異なると、全体の科目数が多くなり、受験対策に苦勞する。併願校は、なるべく第一志望校の入試科目の範囲内に収まる大学から選択しよう。そうすれば、併願校の対策が第一志望校の対策にもなり合理的だ。併願校だけの科目を勉強するために、第一志望校の対策が手薄になるような状況は避けたい。

難 易 度

自分の偏差値±3～5 の範囲で受験校を選ぶ

合格圏の目安は、自分の偏差値±3～5程度。受験校は、難易度がこの範囲内の大学から選ぶのが基本だが、特に現役生は、受験期にかけて実力が急上昇することもある。高望みと思える大学でも、今後の頑張りと学習戦略によっては手が届く可能性はある。そこで、今後の学力の伸び幅に応じた、複数の併願プランを考えておく手もある。とはいえ、この時期から極端な大逆転は期待しないこと。

配点とその比率に注目！ 得点戦略も考えてみる

入試科目を確認するときは、各科目の配点やその比率にも注意。得意科目の配点が高く、苦手科目の配点が低ければ受験を有利に戦える。一般に、個別試験の合格最低点は6割前後。得意科目の配点が高い大学なら、苦手科目の得点が期待できなくても合格点突破を狙える。こうした具体的な得点戦略も考えてみよう。また、国公立大学の志望者は、センター試験と個別試験の配点比率にも要注意。

実際のレベルや相性を 過去問で確認する

合格難易度などのデータは併願校の検討に不可欠なものの、あくまで基準にすぎない。実際の難易レベルは、過去問でより具体的に把握しよう。できれば実際に解いて、出題内容、レベルを確かめながら、ハードルの高さを体感したい。出題傾向との相性が良ければ、データ的には厳しくても可能性は出てくる。

※慶應義塾大・法は400点中、英語の配点は200点で英語重視。他の文系学部も同様の配点である。早稲田大・教育・数学は200点中の100点が数学である。国公立大では、東京工業大がセンターで基準点を超えれば、個別試験だけで合否判定が行われるが、750点中、数学300点、理科300点で理数重視。東京学芸大・中等・数学もセンター1100点に対し、個別は数学のみの試験で1000点満点である。一橋大・社会・前期はセンター180点中100点を理科にあてている。

選択科目とその条件、 出題範囲を慎重に確認

数学、理科、地歴・公民などは、まず自分の履修科目、受験したい科目が選択できるのかを確認すること。一部の選択科目について、条件つきで選択を認める場合もある。また、センター試験の理科は、センター出願時に登録した選択パターン（A～D）と各大学の科目指定との合致に注意しよう。その他、数学・理科の出題項目（個別試験）や、国語で古文・漢文を含むかなども見逃さないこと。

入試条件の変更など 難易の変動要因に注意！

入試の難易は、様々な条件によって変動する。そうした変動をもたらす要因にも注目したい。特に、入試科目数の減少や募集人員の増加などの入試条件の変更、前年の入試における志願者の大幅な減少などは、志願者数が増加（→倍率・難易度アップ/その逆もある）する要因になり得る。入試データブックなどを参考に動向に注意しよう。

※昨年はNHK朝ドラ「あさが来た」の影響で日本女子大の倍率が上がった。今年は、建築系の人気が高い状況が伺える。2020年、東京オリンピックを見込んでの人気上昇は昨年度も見られたが、リオが終わったところで、さらに注目度アップか？
国際系も引き続きの上昇傾向は強い。